

伊藤秀史，小林創，宮原泰之『組織の経済学』
初版，訂正箇所

【第2刷】

- (1) 183 ページ，下から 2 行目
(誤) 従業員に支払われる期待報酬額...
(正) 従業員に支払われる期待ボーナス額...
- (2) 246 ページ，下から 3 行目から 2 行目「従業員が努力したとしても雇用主はボーナスを支払わない。」を削除する。
- (3) 253 ページ，下から 2 行目に「努力しないときはボーナスを支払わない。」を追加する。
- (4) 265 ページ，7 行目
(誤) ある期において怠けたときに
(正) ある期においてボーナスを支払わないと決めたときに
- (5) 269 ページ，10 行目
(誤) 第 26 章
(正) 第 25 章

【第1刷】

- (1) 126 ページ中ほどの $\mathcal{I}_{\text{部下}}$ で始まる等式
(誤) $\mathcal{I}_{\text{Nature}} = P_{\text{Nature}} = \{\{b\}, \{c\}\}$
(正) $\mathcal{I}_{\text{Nature}} = \{\{b\}, \{c\}\}$
($P_{\text{Nature}} =$ を削除)
- (2) 127 ページ，部分ゲーム完全均衡の定義中
(誤) すべての部分ゲームにおいて，その戦略がナッシュ均衡・・・
(正) すべての部分ゲームにおいて，その戦略の組がナッシュ均衡・・・
- (3) 177 ページ，脚注 3
(誤) web 付録 6.2
(正) web 付録 6.1
- (4) 181 ページ，脚注 4
(誤) web 付録 6.3
(正) web 付録 6.2
- (5) 182 ページ，下から 5 行目
(誤) web 付録 6.3
(正) web 付録 6.2
- (6) 197 ページ，脚注 9，2 行目
(誤) $0.5b - 1 < 0.8b - 2$
(正) $0.5b - 1 > 0.8b - 2$

- (7) 228 ページ, 3 行目
 (誤) 雇用主: $10 + \delta + 10\delta^2 + 10\delta^3 + \dots$
 (正) 雇用主: $10 + 10\delta + 10\delta^2 + 10\delta^3 + \dots$
- (8) 247 ページ, 数式 (1) 直前の文章
 (誤)... を満たすことが必要である。
 (正)... を満たすことが必要である。
 (「る」を削除)
- (9) 250 ページ, 図 8-2 の点の第 1 座標
 (誤) $\bar{u} + 1/\delta$
 (正) $\bar{u} + 1/\delta - 1$
- (10) 256 ページ, 下から 10 行目
 (誤) (10) と (14) の両辺を足し合わせて整理すると
 (正) (10) と (14) の両辺を足し合わせて整理し, $b > 1$ であることを用いると,
- (11) 260 ページ, 2~3 行目
 (誤) 費用は発生しないものとする。
 (正) 費用は発生しないものとする。
- (12) 263 ページ, 14 行目
 (誤) ... 怠ける。 $w' \geq \bar{u}$ を満たすような ...
 (正) ... 怠ける。 $w' < \bar{u}$ を満たすような ...
- (13) 274 ページ, 脚注 3
 (誤) 文献ノート参すること。
 (正) 文献ノートを参照すること。
- (14) 289 ページ, 12~15 行目
 (誤) さらに, 同様の議論を通じて, メンバー 1 はどちらの状況であっても根回しをし, 上司は根回しを観察したら X2 を選択し, そうでない場合は X1 を選択するという戦略の組み合わせも一括均衡となる。
 (正) 削除
- (15) 289 ページ, 4.2 節の末に以下の文章を追加
 最後に, このゲームでは, どちらの状況でも根回しを行うという一括均衡は存在しないことに注意しよう。まず, 上司は根回しを観察した場合, もともとの確率分布で予想するので, X1 を選択すると期待利得は $2/3$ となり, X2 を選択すると期待利得は $1/3$ となるため, X1 を選択する。他方, 根回しを観察しない場合の情報集合には均衡戦略のもとでは到達しないので, 上司は任意の予想を形成し, その予想によって選択するプロジェクトが変わりうる。しかしながら, この上司の予想によらず, メンバー 1 は根回しを行うインセンティブを持たない。なぜなら, たとえば, よい状況のもとで, 根回しを行うと, 1 の利得しかもたらされないが, 根回しを行わないと, どちらのプロジェクトが実施されるにせよ, 最低でも 2 の利得を受け取ることができるからである。この議論は, 悪い状況にも応用することができる。
- (16) 289 ページ, 4.3 節の上から 2 行目

- (誤) 3 つのどの均衡の効率性
 (正) 2 つのどの均衡の効率性
- (17) 289 ページ, 下から 8 行目~下から 4 行目
 (誤) 最後に, 常に根回しをする一括均衡の場合, よい状況の場合はメンバー 1 は 3, 上司は 1 の利得を受け取り, 悪い状況の場合はメンバー 1 は 2, 上司は 0 の利得を受け取るので, 期待利得和は $1/3 \times 4 + 2/3 \times 2 = 8/3$ となる。したがって, 分離均衡が最も効率性が高い望ましい均衡となる。
 (正) 削除
- (18) 290 ページ, Column 9-2 中の引用文献
 (誤) Bandiera, O., S. Hansen, A. Prat, and R. Sadun (2017) “CEO Behavior and Firm Performance,” Harvard Business School Working Paper, 17-083.
 (正) Bandiera, O., S. Hansen, A. Prat, and R. Sadun (2011) “What Do CEOs Do?” Harvard Business School Working Paper, No. 11-081.
 追加情報: Bandiera, Hansen, Prat, and Sadun (2017) の方は, ブラジル, ドイツ, インド, イギリス, アメリカの CEO を対象とした調査を行っており, CEO が人と会っている時間は 70% であることを明らかにしている。この論文は, 経済学のトップ専門雑誌の一つである *Journal of Political Economy* に掲載された。
 Bandiera, O., S. Hansen, A. Prat, and R. Sadun (2020) “CEO Behavior and Firm Performance” *Journal of Political Economy*, 128(4), pp.1325-1369.
- (19) 290 ページ, 下から 2 行目
 (誤) 上で議論した 3 つの均衡
 (正) 上で議論した 2 つの均衡
- (20) 291 ページ, 2 行目~10 行目
 (誤) 根回し費用が 1 だけ高くなった状況を考えよう。まず, どちらの状況でも根回しを行うという一括均衡が均衡でなくなる。ここで, 根回し費用は先手のメンバー 1 のみが負担するので, 2 段階目の上司の意思決定には影響を与えないことに注意しよう。根回しを行う一括均衡では, 上司は根回しを観察すると X2 を選択し, そうでない場合は X1 を選択する。それゆえ, メンバー 1 は悪い状況において想定どおり根回しを行うと, 先ほどの同じ状況での利得より 1 小さい 1 の利得を受け取るが, 根回しを行わないと 2 を受け取る。したがって, 根回しを行うことが最適反応ではなくなってしまう。
 次に, 分離均衡への影響を考察する。
 (正) 根回し費用が 1 だけ高くなった状況を考えよう。このとき, 分離均衡への影響を考察する。
 (「まず, どちらの状況でも」から「最適反応でなくなってしまう。」の文章を削除し, 「次に,」の文章の最初を「このとき,」に修正し, 文章を前の段落とつなげる)
- (21) 327 ページ, 図 10-1 の利害一致, 採択後の利得
 (誤) $(-50, (B + 50) - 100)$
 (正) $(50, (B + 50) - 100)$
 (最初の 50 の前のマイナスを削除)
- (22) 355 ページ 2 行目

(誤) 新メンバーは実績がないにもかかわらず、企業の評判のおかげで部下から信頼を得ることができるのである。

(正) 上司は評判を次の世代に渡すことによって次世代の上司が部下の信頼を得ることができ、老年期に高い利益を得ることができるのである。

(23) 386 ページ, 脚注の 1 行目

(誤) $\pi 2w$

(正) $\pi \geq w$

上記の訂正につきましてご指摘いただきました, 井上朋紀先生 (明治大学), 濱田弘潤先生 (新潟大学), 福田慧先生 (ボッコニーニ大学) には深く感謝申し上げます。